

歌合

光の孝子孫政家

全

大日本圖書會		
出品	原簿	種別
出品者 石橋象山 摘要	一七六	
品名 歌合		
光明孝子孫政家		



紙數卷拾可收也

弄合

貞永元七



光明峯寺攝政家

題

寄衣函

寄鏡函

寄弓函

寄玉函

寄枕函

寄帶函

寄糸函

寄筵函

寄船函

寄網函



哥人

左方

植大納言基家
右是勢為家
右是成實
家長納言
親季納言
申文少將

右方

民部口典侍
信實納言



春之植大更良實
右是内口家隆
資季納言
親氏納言
知宗

植中納言定家
忠俊



隆祐

行能館長

下野

正之位知家

源家治

中文仙馬

兼康

判者

持中納言定家

一番

左指

弁夜恋

持中納言基家

くれるぬのころえ乃夜ぬらそめてんれん城志せはぬ

右

氏部心典侍

宿乃うのぬ夜もくれる井の冬よてや今公恋し記

た志名可り取好之旨立仰あ方共之可

難中事い中りみ夜れ之た徹心は深

難合い台名り

二番

左勝

春之吉吏良實

まひ夜もむらさきの冬よてみれぬゆら志のあひ

右

持中納言定家

秋葉の落ちし夜を以て神也
右文不難申切并其年推し海秋葉之謂
之申之干時秋也隨時言其年真之申被
宿作左忠衣恙以系有故詞花摺又可
為勝之申定申

之書

左勝

右邊智為家

志之落のさくもわむ
あま衣まこく此神之
信實の信

志のあふれ志の衣今ら移るる
あ方共不出難詞之感氣家長の信
姫衣不純之詞雖優石珠左林衣之白

殊其真味之軟同之趣仍為勝

之書

左拍

前之書の家際

系してゆきそくは此の
志後

おひ志連じのふくも乃志衣
後とた方之間以て
海子一同感歎海神志奇
衣之いつきるも妖艶
其り可拍奇也依相合雖為持不可准
常拍之申被定

又書

九 拵

普部成實

此のちや月いしくさうとして此のるもやとくしおん

た

隆社

亦う夜かこのぬあまの結ぬいづらいつましく羨とやんる

た新始終叶くあ優くた新とつりゆかて

勢く又可ぬ持申定申

六 番

九

賀季朝臣

月系乃を乳まう夜あまのこまられ父のうつりゆ

た 隆

源家清

か衣袖のるも乳まうゆりこまられ父とくせとや

たあぬしく初さありくゆらうくゆらう

又ふりまいつつまつ建八十首乃初歌りこまら

あつりまもゆらうくあ申あ勝

七 番

九 拵

家長朝臣

此にあ海神のるも乳まう川らるんましく衣あや

た

行能朝臣

さ初しんもまも乳まうさ免色初れまもあま

たあ申あまも乃あ川らるんましく衣あや

くいふあひも乳まう申た初まうまの

あまもまらる又優ありよりてあ特

八 番

九

頼氏朝臣

このはらうも夜のまゝあつてまはれども地はおろろれは

大勝

中文傳

このやがぶ身のしら夜しら志めり才とさる毎よかたるれつ
夏のきと枕よあいんふり返されしうれ要り
つこちやんくゆりきとち又優よゆりゆり勝

九番

大

新市の物語

あふ人のあふけ夜回さくこのまをさうくゆのまよたらん

大勝

下野

いふせん志のむふ袖ぬれてこころれはあぬをこねしうりし
流るる夜さる難もゆりぬと又めつし
あふぬし申本うれあぬ様のまを夜籠とて勝

十番

大

知宗

我がふさふぬぬいし月ふ志あされ夜しらぬれり

大勝

兼原

歳さる身がうりも乃る夜るれまさうて秋をゆ
た弁之可難申旨大弁るまはまうて
よ優あうり定られて勝

十一番

大

中文が将

いふせん夜しらまひさく移しまぬこは祿とのそく

大勝

正之位知宗

夜籠のやうな夜ぬれれとあぬるるるるるるるるるる

た優よとくしき名りたのや一月の衣ぬをた
あぬまのまふきんはよまゆあててお膳

十二番 奇鏡恋

た 九条大酒を本家

つれあふと并れあつのもよかあぬまきんたあきん

た膳 民部曲侍

そえを流くうぬえん乃けまた後居そえやハミナリ
ふ井のあわとあるゆれくとりやあの中りき
洞屋そえやハミナリあつしと中人とて膳
さうらう膳

十三番

た 春又持若更良實

おけくえぬあきんこのよと後あぬ紋は流やん

た膳 市橋中納言定家

おくあれ花乃くみのうきもしつたあきん乃ううや
二見の浦乃浦と後あぬ殊は中り作
た并り白輪急早後ゆは信所乳文あ膳

十四番

た膳 志摩守督あ家

みさの飛りつたこけとてるそ一申ハミナリ

た 信實船長

うねひ乃あきん乃て浦と後あぬつとややみ
志摩又優手ゆれとくきん乃のうきん
ゆはとあきん乃そたてゆは中膳

十一番

九

前之内の家書

あはれくもあしうらなげしめかきおし給ふ所ありて

右勝

忠俊

ちよめつらむるはるきと悪しと云ふはしりしは

たのんぬまの島あつかりしと云ふはしりしは

くちやひくひれきよはゆれはる勝

十六番

九

若狭の成實

あつかりしはあつかりしはあつかりしはあつかりしは

右

隆社

あつかりしはあつかりしはあつかりしはあつかりしは

同宿のうらなげしめかきおし給ふ所ありて

十七番

九

資季の信

あつかりしはあつかりしはあつかりしはあつかりしは

右

源家清

あつかりしはあつかりしはあつかりしはあつかりしは

あつかりしはあつかりしはあつかりしはあつかりしは

あつかりしはあつかりしはあつかりしはあつかりしは

十八番

九

家長の信

あつかりしはあつかりしはあつかりしはあつかりしは

右

行徳の信

申を後うつりしものどとさうりにあはれぬもさうり
 た人情あり共具あるは申人かゆり
 志勢やゆりくゆりゆりゆり

十九番

た勝

頼氏朝臣

あまのつゆもあはれぬもさうりにあはれぬもさうり

た

申文伝

あまのつゆもあはれぬもさうりにあはれぬもさうり

た官さうりゆりゆりゆりゆり

廿番

た勝

親孝朝臣

あまのつゆもあはれぬもさうりにあはれぬもさうり

た

下野

あまのつゆもあはれぬもさうりにあはれぬもさうり

あまのつゆもあはれぬもさうりにあはれぬもさうり

廿一番

た勝

知宗

あまのつゆもあはれぬもさうりにあはれぬもさうり

た

兼康

あまのつゆもあはれぬもさうりにあはれぬもさうり

あまのつゆもあはれぬもさうりにあはれぬもさうり

あまのつゆもあはれぬもさうりにあはれぬもさうり

あまのつゆもあはれぬもさうりにあはれぬもさうり

廿二番

たお

中交傳る

さかふく遠方とてぬるゆきしるるもいん西船あき

た

正之位知家

かきとあはらるる新とてまめあはらるるのまこと

あ首之得失可ぬ持て申さ

亦之番

あ弓懸

た

九条大納之基家

ちきりのあはらるる冬とて今忘れの末れ秋凡

た勝

氏部之具侍

今とあはらるる冬とて今忘れの末れ秋凡

ちあふ云たた同あはらるるまゆこり侍れとて

おく町ぬとあはらるる檀の本に侍るをり歌よふや

侍んとて定家とてあはらるるのまゆこと一向にお

ゆふにらるる誰は侍りしや名申すをり

記とてもつけくやられん侍りん秋の冬とて

まゆこりゆき偏すぬる深きおれ文誰用職月

當心の境をぬ樹木とて名字定遠り矢し疑

殆云れ依き誰た可勝とて

た口番

た勝

春文格た文良實

みらるるあはらるるのまゆことすたなといふか

た

系格申納之定家

かりぬひのあはらるるのまゆことすたなといふか

あはらるるのまゆことすたなといふか

申て以た為勝

又番

左勝

志實智為家

此ふとあるは月夜志實智のうらやまのこゝろ

右

信實智為

我よりうらやまのねおはせしこととていふ人をねま

志實の指すは志實の月夜志實のうらやま

ゆゑに勝

又番

左

前之月夜家

こゝろにねおはせし人のこゝろにうらやまのこゝろ

右勝

志實

志實のうらやまのねおはせしこととていふ人をねま

志實の指すは志實の月夜志實のうらやま

ゆゑに勝

志實の指すは志實の月夜志實のうらやま

ゆゑに勝

又番

左

志實智為

志實のうらやまのねおはせしこととていふ人をねま

右勝

志實

志實のうらやまのねおはせしこととていふ人をねま

志實の指すは志實の月夜志實のうらやま

ゆゑに勝

廿八番

左勝

資貞季節信

つゝいふこととあつらんくもれうなる那

左

源家清

今もあつらんまじなまよひてあまにちきり

昔よりあつらんまよひとふんとふ初め字

今このまよひまよひの中は下りたて

あまのまよひはたはゆる中を定勝

廿九番

左勝

家長節信

はましのまよひまよひあつらんまよひは

左

行徳節信

あつらんまよひまよひまよひのちきり

あつらんまよひまよひまよひのちきり

あつらんまよひまよひまよひのちきり

卅番

左

頼氏節信

なまのまよひまよひまよひのちきり

左

中文節信

あまのまよひまよひまよひのちきり

あまのまよひまよひまよひのちきり

あまのまよひまよひまよひのちきり

卅一番

左

親季節信

ひまわりとてあはれなるあはれなるはむらさきとてあはれなる

た勝 下野

いふまじりのついでとてあはれなるあはれなるあはれなる

た之可難事 たる直ぐ也申ての傍

此二番

た指 知宗

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

た 兼康

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

あ首依之殊深失る特

此三番

た 中文お將

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

た指 正之位知た女

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

た優なるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

あ申ての傍

此四番 うちむさひ

た指 控大胸言基家

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

た 民謡の曲侍

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

後の玉回りのゆれはる傍

此五番

たお

春之始也又良實

玉鬘のこぼれてゐる神波をかく後の玉乃ぬきとてうん

た

京極中納言の御子

もきく一鳥の玉ともをかりてんくもる神の志し玉

あまた宜れし一鳥の御子仍お侍

北七番

たお

たまたまの御子

なげたるぬぬのなるもそき又う玉の成したぬうりや

た

信實の御子

志くまらぬとゆふ神の御あまの志くまらぬ志のそん

名を殊事し申す侍

北七番

た

前之有御家隆

いふらんぬいされとも志くまらんとてんぬあいのそん

た後

た後

いせの御子たまたまの御子とてんぬあいのそん

いせの御子たまたまの御子とてんぬあいのそん

いせの御子たまたまの御子

北七番

た

昔の成實

志くまらぬとてんぬあいのそん

た後

隆祐

いせの御子たまたまの御子とてんぬあいのそん

いせの御子たまたまの御子とてんぬあいのそん

とらふ村は宜しく作らる人々目新しと傳ふと
太孫前より傳ふ

卅九番

丸

賀本子船長

恵まらるるこの玉より奉乃神一乃波とひもむすれ

太孫

源家清

志平とくハ玉とひらわぬ神の波深乃教となすまうらん

太孫優り流り傳ふ中にて傳ふ

卅十番

丸

家長船長

使むる玉と人とそ一よりこれ面新よさよかけを記

太孫

行能船長

あまの御方あはれ乃まらにぬく玉れんこれくふは深あり

使むる玉めつーさふは傳ふと太孫一とく

傳ふれ中申ふ傳

卅一番

丸

親氏船長

人志まら秋のちさうり乃をりを伝ふのうさ一ハ一内申

太孫

中文傳ふ

あまの御方あはれ乃まらにぬく玉れんこれくふは深あり

秋の契十二年一と傳ふ一ハ一深心文れ七月七日の

事一もや中申ふ人々傳ふ中申ふあり一玉れ

かんき一ハ一詞一ハ一傳ふは傳ふ人玉ありぬ身

歌よかれひくく傳ふ

四十二番

左指

親季子御指

志氣人の御指志を玉に流しふとひくまで十ひやうとせ

右

下野

うまそつ神の御指せを流し給るるこの玉といひけれん
右志若^{たれ}は優るるうし給く御指

四十三番

左

知宗

玉の流乃きうもえりまのよの玉はうりあふるる御

右指

兼康

かみせし流のうらおも志きりきんとぬめの神の志を玉
玉流ししきりきり可流しと人しりたらう

流しつうまらぬるし御定御指

四十四番

左指

仲文お侍

いしきりし流をわつらひぬ玉の流をうくとしとせ

右

西之位知宗

たまましりわき流の玉の流をうれ舞はむとせうりし利

玉流しうくむ可流し中名し御指

四十五番

右指志

左指

九条大御言基家

せく奉のうし流の御くとの志流のうしりきりせぬ

右

民部御指

あまの御指や志流志うぬるるあまの御しりし御指

女よ吾列詞

四十六番

た

春文拾遺更良實貫

志れゆゑのこゝろに枕あり秋の冬にこゝろに

た

拾遺之定家

こゝろにまよふせの後の新枕ささむこゝろに月日あり

おぼろのこゝろに枕意のつも文ぬくゆゑに侍

るる取と侍らぬ新枕依所氣文為侍

四十七番

た

志連替為家

志れゆゑのこゝろに海河まゝるるれてるるるる

た

信實貫

な成さる枕がうや海河舞いふ福一おのこゝろに

志れゆゑのこゝろに侍らぬ新枕依所氣文為侍

侍らぬ新枕

四十八番

た

志連替為家

うゝゝのこゝろに侍らぬ新枕依所氣文為侍

た

志連

なげこゝろに侍らぬ新枕依所氣文為侍

侍らぬ新枕依所氣文為侍

侍らぬ新枕依所氣文為侍

四十九番

た

志連替為家

なげこゝろに侍らぬ新枕依所氣文為侍

さけりに神のまゝに成る所のまゝにそゝ恋れゆらとたうりぬは

た

澄祐

あふとまゝに枕のちりとりゆんぬ夜はとてはけりか物から

枕と恋のゆらとぬらちりとりとをぬくそはけりかま

直のうーりてぬ物

又十番

た指

加賀季子朝臣

人志事とあつるまゝに流枕とてうらゝそと恋も成る

た

源家清

うさねひとりや縁もんり川うとあれり木の浪の枕り

海の流れ枕とにちりくゆり侍とさきうひとりや

移らん又よそへさきうは是程ぬ物

又十一番

た指

家長朝臣

思まけうたせのまゝとさきと掉のまゝと恋も成る

た

行徳朝臣

たふとありとけりか志もあもか縁ゆり流はとさき

た新羅ハゆり侍もめつりかぬもただ

流のまゝとさきと恋も成るまゝとさきとさきとさきと

又十二番

た

頼氏朝臣

袖のうら流はあやめてあめれ枕のちりハ人やさき

た指

申文朝臣

あふとまゝに枕のちりとりゆんぬ夜はとてはけりか物から

はあとのやめて優るはとP人ありとたぬは

二十六番

九指

親季船長

たしつ川さうぬ申ふるはるはのしつ川とぬまうく

た

下野

弟枕あつたむまひしゆめあはれとさきつとられとのさか面うけ

たしつ川さうぬ申ふるはのしつ川とぬまうく

二十七番

九指

知宗

伯人のこまをの枕あをれあつとつとさきつとられとのさか面うけ

た

兼康

立いつるこまをの枕あをれあつとつとさきつとられとのさか面うけ

伯人のこまをの枕あをれあつとつとさきつとられとのさか面うけ

二十八番

九

中文お將

志んぬし乃枕あをれあつとつとさきつとられとのさか面うけ

た指

正之位知宗

ふしつ川さうぬ申ふるはのしつ川とぬまうく

たしつ川さうぬ申ふるはのしつ川とぬまうく

二十九番

九指

九条大綱之基家

伯人のこまをの枕あをれあつとつとさきつとられとのさか面うけ

た

民部卿知宗

かりとぬまうく

あそはばよゆりし者申る物

六十七番

た指

春之指其良實

今より秋かといふりしとむらさきとくしとさけいふたゆり

た

指申納之定家

いせ人か建たれ下帯れわうきし道よめりあはすき

あそはば

六十八番

た

志建勢為家

あそはば乃志川がり帯ゆいこのまじしはねを繋るれしや

た指

信實貞物

あそはば乃志川がり帯ゆいこのまじしはねを繋るれしや

志新優よゆりた神めりしゆりてはくゆり

ゆりしし申てたは指

六十九番

た指

志新優よゆり

めりあはばもさぬむらさき乃ひらさきのまじはゆり

た

忠俊

むらさきのまじはゆりしゆりてはくゆり

むらさきのまじはゆりしゆりてはくゆり

志新優よゆりた神めりしゆりてはくゆり

七十番

た指

志新優よゆり

あそはば乃志川がり帯ゆいこのまじしはねを繋るれしや

た

陸林

むまひをー花田のおひ乃いくよーくおまぬよーくおまぬん
花田のおひせくるん又いりたをまねる様

六十一番

た指

資季船指

ちきうよーいねおひよ花ひんるまじにー中し今ハ海入し

た

源家船指

心のをれよのおひの望すらよーうけおまひんひとさー
あそまねるねー中Pくぬ指

六十二番

た

家長船指

慈母の望すらよーおひのむとあましんーまけをまじとけるん

た指

行能船指

あーの山田よあひんら幸乃うりよまことけぬ繁るりり
山田あひんら幸めつーまじ中申てる様

六十三番

た指

親氏船指

月並花田乃おひのまをせめくかきうにうけをてまじ
中文船指

た

おひあきー繁たは山越のあまの下幸めうおひあん
た優りーまじ中Pくぬ指

六十四番

た指

親承船指

山乃志別乃おひのいくうりまじ中Pくぬ指

た

下野

る川やあやう契やむまひおき一茶山のおひのうやとてい
ちたを得た為持

六十八番

た指

知宗

契のこ志いもこおひ成むまひても根志さるむじり

た

兼康

志さうも志いもこ常の四ヶあをむまひれらる契も

志川もこおひり又目新記

六十九番

た指

申文お将

さても又身もはもあれると常此山又わらや契もいん

た

西之位知家

いんの契もいふむまひん志川も常此山又わらや契も

又申旨程不能持員

六十七番

家の系志

た指

九条大納言基家

あぬあはるれやとあゆま乃い成さうにさとる

た

民部口曲い付

かき 九条朝のうおおひくうらうくゆらうのうとて為持

六十八番

た指

春文松屋良實

あふれまたたしゆにひく系れをれ人とまぬあをあさ

た

控申御言定家

たつひとこれいじもるれおしけいへんくすいふと後とあ

たは信申申仍る指

六十九番

た勝

志進勢為家

あふまをれ賢とまふたなるむさ乃てひまは家の意のまは

た

信實御指

さふまをたうくとまてしたのまはとあて川の系れまは

た奇とまふとついに系よふれ御作の申たは指

七十番

た指

義子内家勝

きふふ人のこいとつりうまてわななのとのまんとん

た

志俊

あはれ乃をれこの系れさうにあふれも志ぬえこつては

人のこ系よりうまて御まらうしく御の指を

喜御の花田の系も御は志まひうてまの指れと

依に殊作るた勝

七十一番

た指

志敏成實

あつぬあのをれ御とにこ系れまはさうれににあやまらん

た

隆祐

く親見れちさうも今ういふのいれ御ふたはまらん

あそ御又と指指御方

七十二番

七十四番
た

習字の書

あつたはひとらそふのこれよふぬとてんれあん

た

源家清

くうへーあつたはひとらそふのこれよふぬとてんれあん

唯雄丸

唯雄丸

七十三番

た

家長教信

あつたはひとらそふのこれよふぬとてんれあん

た

行徳教信

あつたはひとらそふのこれよふぬとてんれあん

けんのかさふとあつたはひとらそふのこれよふぬとてんれあん

一とつらふ

七十四番

た

頼茂教信

あつたはひとらそふのこれよふぬとてんれあん

た

中又信

あつたはひとらそふのこれよふぬとてんれあん

あつたはひとらそふのこれよふぬとてんれあん

七十五番

た

親孝教信

あつたはひとらそふのこれよふぬとてんれあん

た

下野

あつたはひとらそふのこれよふぬとてんれあん

あそと入を殊得矢中申

七十六番

左

知宗

うつりあ人の心もさういとのあはくやくてけせなるとん

左猪

兼康

せきさんにもあはくさういとのあはくやくてけせなるとん

白糸のあはくさういとのあはくやくてけせなるとん

七十七番

左猪

中又が将

かりかきあはくさういとのあはくやくてけせなるとん

左

正之位知宗

くーはくいあはくさういとのあはくやくてけせなるとん

たすつこの朝二つあるのりーた又優之仍為猪

七十八番

高の庭意

左

九条大御之基家

うらえー衣さういとのあはくやくてけせなるとん

左猪

民部卿の侍

うらえー衣さういとのあはくやくてけせなるとん

信託乃衣を指要しく申者申左為猪

七十九番

左猪

春又権ち吏良實

笛竹のやこらあはくさういとのあはくやくてけせなるとん

左

系極の納之定家

あつあつとあはくさういとのあはくやくてけせなるとん

八十番

伏見里殊猪し空一回能申推布云定持

左

右連勢為家

あふりなりすの小田のいさむらう落た神の六礼やいさ

左猪

信實助信

とほくにうさるふのさむらうはあはれのこくねん

左を指申す左太徳英中一為猪

八十一番

左猪

藤之内の家隆

今も神を人屋あやめんあやむらう取ふるさすても志き

左

右後

もろやまの取乃着成るこんりてうつもほくさこれむら

人やあやめんあやむらうおしくすのち又

妖艶に中維名申一依作左猪

八十二番

左猪

岩波の成實

あむらるるもれ落のふてぬさよれおりてめて志記ふらん

左

隆祐

たひねのあもれ教へ志きうくとにあらりてむむら

たのさむらう洞の教へ志記えんとこを教給ふ

よやゆらうむとりく左猪

八十三番

左

治貞系助信

志きぬれおり志く心のこけむらうぬあもあはなけくは

太猪

源家清

ふらふらとぬしつゝ乳をうけ給ふに結風をゆ

太猪よりこころをいへり申くを贈

八十四番

太猪

家長船

ふらふらとぬしつゝ乳をうけ給ふに結風をゆ

太

行船船

ゆきゆきとむねとて春のあやむらうをいへり給ふに

太猪はつとぬしつゝ乳をうけ給ふに結風をゆ

あやうらふらとぬしつゝ乳をうけ給ふに結風をゆ

慈切に芳賀おるいふありとく太猪

八十六番

太

頼氏船

ゆきゆきとむねとて春のあやむらうをいへり給ふに

太猪

中文船

ゆきゆきとむねとて春のあやむらうをいへり給ふに

太猪はつとぬしつゝ乳をうけ給ふに結風をゆ

八十六番

太

頼氏船

ゆきゆきとむねとて春のあやむらうをいへり給ふに

太猪

下野

ゆきゆきとむねとて春のあやむらうをいへり給ふに

太猪はつとぬしつゝ乳をうけ給ふに結風をゆ

あやうらふらとぬしつゝ乳をうけ給ふに結風をゆ

ふりさへもとくは務

八十七番

たお

知宗

むらり孫の取成むらうおとたはなむらうあひん

た

兼康

きんく粒きらんおあむらうあひぬるむらうあひ

五殊務方又る持

八十八番

たお

中又お將

うれおとこのまちうれ務らんぬあわむらうとむむらう

た

正之位知家

たむむらうとむむむらううれ務らんぬあわむらうとむむらう

は番又去り優なりとむ五務員

八十九番

うらふ意

たお

九条大納言基家

神のうらむらうもあひんくむらうあひぬるむらう

た

民部卿持

ふらうおとむむむらうあひぬるむらうあひぬるむらう

た神の浦うらむらう海のえあひぬるむらうあひぬるむらう

あひぬるむらうあひぬるむらうあひぬるむらうあひぬるむらう

子ゆらぬは粒石能務員

九十番

た

春之松あ良実

あむらうの成なりまつあひぬるむらうあひぬるむらう

志緒

松中流を定志

志海舟乃神のうらみくるくはりうしや
年の終なきまうしめ殊緒に申答同申
ゆりしこと可ぬ志緒に申被作

九十一番

志

志是勢為家

う此中乃ありり山舟は海を成おれしや
信實の信

志緒

信實の信

いぬりし風の志人れなみのるにぬるあすの
う此中のありり舟石耳云く申ゆりも志為緒

九十二番

志

志は舟の家流

浪きかき人乃んれあしそはまうら志けぬ
志は舟の流

志緒

志後

んれ免る志舟のあされいさう
人のんれあしそはまうら志をぬる年
志とくゆ回しや志とくしそはまうら志とく
志後秀造に申仍為緒

九十三番

志

志は舟の成實

志は舟の流らちるふゆ
志は舟の流らちるふゆ

志

志は舟

あし志は舟の流らちるふゆ
志は舟の流らちるふゆ
志は舟の流らちるふゆ

右左又之申旨左為勝

九十四番

左指

賀季子船指

此船其真海をさぐり此あま山船よりみりやうに成るる

左

源家清

此船其真海をさぐり此あま山船よりみりやうに成るる

左舟其申被申人ありて為勝

九十五番

左指

家長船指

この船あま山船よりみりやうに成るる

左

行徳船指

此船其真海をさぐり此あま山船よりみりやうに成るる

右首之申末為勝

九十六番

左

頼氏船指

此船其真海をさぐり此あま山船よりみりやうに成るる

左指

中文船指

此船其真海をさぐり此あま山船よりみりやうに成るる

右舟其申末為勝

九十七番

左

親季子船指

此船其真海をさぐり此あま山船よりみりやうに成るる

左指

下野

此船其真海をさぐり此あま山船よりみりやうに成るる

かゝる御褒るるに申て為給

九十八番

たお

知宗

おの河原へさすおれなるまよふおのさうていつ後ん

た

兼康

いふもん丹せり流らたふとがよぬぬのうもなるうん

たのつゝも染あううた力ある中して為給

九十九番

た

中ふお将

波のういさとのさるよあつねもさうみたれらあまれつらぬ

たお

西へ後知家

みやとあまれおめれあふよまじいおのれはゆをうららさ

た奇な奇の白れともおうらぬ誰よ

ゆきと申てぬたお

百番

寄網恋

たお

九条大御言基家

ま海のおまれおれゆれよ引網のうもくもいぬ流の中をぬれ

た

民部曲い給

志賀おまの網けりも流るるさぬさうきぬさうみはれをさ

各一之組に申持

百一番

た勝

春又格あま良斎人

あまのよひきれ網のうとあくともぬれぬ恋は神やうらたん

た

格中酒を定書

人へのあつちのきりつたあつちのつてにふとあふらん

たより川の羽のつとあつちと殊緒の中各申

た綱石尋常たつたる緒

百二番

たお

た更勢なる文

たうれと何ひれけてたのきんあつちあつちのつてあつち

た

信實船信

あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

百三番

たお

た更勢なる文

いせの海きぬあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

た

忠後

年屋めあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

た更勢なる文

百四番

た

忠後

あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

た

忠後

あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

如く申事、申中仍以たる様

百六番

たお

賀子御旨

志願はあとのあはれにひく綱れりとも志願はあはれに

た

源家清

かたがぬきのしをにぞく綱のしきひく人もあはれにひ

た右之部申事又お

百六番

たお

家長御旨

むく綱れあはれぬの人のあはれにひく人もあはれに

た

行能御旨

あはれも今いたるしをにぞく綱のふくともあはれにひ

は番又目新

百七番

たお

頼茂御旨

あはれともあはれにひく綱とれくしをにぞく人もあはれに

た

申文御旨

とく綱の志を人のあはれにひくしをにぞく人もあはれに

た直のしをにひくしをにぞく人もあはれに

百八番

たお

親季御旨

しをにぞくしをにひくしをにひく綱のあはれにひく人もあはれに

た

下野

伴舞のあはれにひくしをにひく綱のあはれにひく人もあはれに

ふむく細にがし石可有猪芳之申

百九番

左指

知宗

え一人と志のうにひく細の分やうにゆりくゆん

志

兼康

うめらるあまれ志のうにひく細の分れむひちとうにそめ

石可有猪之旨目取

百十番

左指

中文お将

たはむく細のうをふらうれくのこる人今きりか髪

志

正之位知家

よく細のひくてあまに神ぬれくてもうにぬ派れれ

石可有猪負

左右方人者被申し細不茂し上七旬し老老
病惘然百番し優劣已迷感難快窮堀し筋力
雖待救護し沈頭當座石忘奥味後日弥迷是此
不融我子細定可招其潮欽

猪負左方

九条大納言 猪二指五頁二

春之猪 猪二指四頁二

右馬の勢 猪五指五頁三

前二酒 猪二指二頁二

左馬 猪三指三頁三

猪負木子 猪三指三頁三

家長 猪三指三頁三

頼氏 猪三指三頁三

衆季 猪二指五頁二

知宗 猪二指五頁二

お将 猪二指五頁二

右方之文

^{中云}嘉禎三年二月十八日申 情衣三三兩之...

二月二日書字早一回日一換早

正和元年十二月十三日成實...

とらぬぬの者なきと云ふ...

とひもたれぬきめりやとくれ...

とと川よいそぬいともくむつ...

あひぬ



寛保二成仲冬中旬書字之

教道